そういうロジェの顔を、眼を細めて見た。
「出身は違っても、そいつを信頼してたっていうんだ。人には人情ってもんがあるんだよ」
「人情だか知らないが、そいつを置くなら金は減る。それが嫌なら追い出す。そうやってためらっている時間にもどんどん横領されてしまうのはわかりきったことだ」
イブラヒムはやんわりと首を振った。
「さしたる証拠もなしに長年尽くしてくれた番頭を追い出したら、店の士気にかかわるってこともあるんだろ」
ロジェはいらいらしてきた。
「で、結局その商人とやらは、お前になにをしてほしいと言っているんだ？　わたしが連れてこられたのもそれを手伝うことなんだろうが、話によっては手を引くぞ」
イブラヒムは咳払いした。
「状況からして、支配人が黒なのははっきりしてる。だが、クビを突きつけることもできねえ。証拠がねえからな」
ロジェはまたうなずいた。なんとなくわかってきた。
「……証拠を探せ、ということだな」
「そうだ」
「わかった。そういうことなら、わたしも手を貸してもいい」
サラセン人は目じりに深い皺を刻んだ。
「助かったぜ。一人だとなかなか動きがとれねえからな」
椅子から立ち上がった。ロジェのゴブレットを覗きこみ、残っていた中身を無造作に窓の外に捨てた。別の水差しを持ってくると、注ぎこんだ。
豊かな葡萄酒の香りが湧き立った。
「遠慮せず飲め」
と、口をつけた。ロジェもつられて一口含む。
いい葡萄酒だ。温暖なシチリアはいい葡萄ができる。故郷のノルマンディで呑むより、ずっとうまい酒だった。それほど酒に強いたちではないロジェも、ちょっとこの島にいてもいいかなと思い直すくらいだった。
気前よく振舞われ、その日の会合はそれで終わった。

「さて。どうやってそいつの家に行くかねえ」
翌日。少しの二日酔いを持て余しながら、今度は一人でイブラヒムの家に行った。

「なにも考えていないのか？」
軽口がすらりと出たのは、昨日のうまい葡萄酒にほだされたのかもしれない。
そこから始めるとは思わなかったのも事実だが。
「あんたはそいつの雇い主と懇意なのだろう？　理由はなんとでもつけられるのではないのか」
「そうだな……」
横目でロジェの顔を見る。
「奴の好みは、欧州人の女なんだ」
「……それで？」
いったいなにを？
首をかしげているロジェの顎に手をかけ、慣れた手つきでこちらを向かせる。
「あんた、ずいぶん美形だよな。肌も白いし」
「は？」
無遠慮に相手の顔が寄って来た。舐めるようにロジェの顔を見る。薄気味悪いが、精一杯睨み返した。相手はまったくこたえていないようだったが。
「あんたなら、奴の気に入るだろうよ。いや、どんな男だってきっといちころだ」
だんだんと相手の考えがわかってきたような気がする。わかりたくない。
「寝言は寝てから言え。無礼な」
手を払おうとしたが、イブラヒムの手は顎をつかんだままびくともしない。
「奴は女に眼がないと聞いてるぜ。こんなきれいな女がいれば気をゆるめるんじゃねえか？」
「ほう。あんたの回りにそんな女が身近にいるのか？　危ない真似はさせられないぞ」
「すっとぼけやがって」
にやにや笑いに、わざとらしくため息を吐いてやった。
「わたしは女ではない」
「だからだよ。あんたも今言ったじゃねえか、女を敵地に連れて行くことはできねえだろうが」
「女装は神の教えに背くことだ」
「細けえこと言うなよ。義を見てせざるは勇無きなり、って言うだろ」

意味が分からない上に、間違っているような気がする。覚悟を決めろ、と言われていることはわかった。
こんな茶番はごめんだ。
叫びそうになるのを、ぐっと飲みこんだ。この島から出るためだ。
「……服はどうするんだ」
しぶしぶと言った。
そう来なくてはな、とサラセン人の農夫はほがらかに笑った。

「……悪くねえな」
ロジェは答えなかった。自分の姿を見ることはできなかったが、見たいとも思わない。不機嫌そうな顔をしたにもかかわらず、イブラヒムは絹で飾られた胴を引き寄せる。
「おれの好みからするとちぃっと背が高すぎるが、うん――悪くねえ。今宵の伽を申しつけるぜ」
「ふざけている場合じゃないだろう」
迫る顔を押しのけた。冗談にしてもたちが悪い。

また潮の薫りがした。テーブルをはさんでなく、すぐそばに立っているせいかさっきよりも強い。シチリアは島国だけれど、ここは海から少し離れている。空気にそんなに強く海風が混じるとも思えない。釣りでも趣味にしているのだろうか。
青に染めた絹の手触りは心地よかった。高価なものだろうに、ロジェの身体に合わせて気軽に丈や幅を手直しした。見た目によらず器用な手つきに関心する。
「うまいもんだな」
「ま、布を扱う仕事だからな。即席で直しただけだ。見栄えはよくねえがしかたねえ。――髪、そのままじゃまずいな」
イブラヒムは背中に回って髪をすくい上げた。
「銀の髪か。薄い色は欧州女好みのあの男の気に入るだろうな。長いのもありがてえ」
髪を編む気配がする。
すぐそばで動くたび、海の匂いが強くなる。
懐かしい気がした。